

# 同朋大学佛教文化研究所報

第 27 号

発行日 平成二十六年三月二十九日  
編集・発行 同朋大学佛教文化研究所

代表者 小島 恵昭

〒四五三、八五四〇

名古屋市中村区稲葉地町七の二

TEL (〇五) 四一三一 三三三

FAX (〇五) 四一三一 三六九

e-mail : bc-inst@doho.ac.jp

(題字は池田勇諦元学長)

同朋大学仏教文化研究所は、初代学長稲葉園成先生の「広く仏教文化の研究と交流に寄与し、もって地域社会に貢献する」との学園設立の趣旨に根ざして、教学・歴史・哲学・文学・教育など、仏教文化を総体として探求することを目的として設置されています。

大学の主たる目的は、社会有用の人材養成のための教育と、高度な学問領域の研究の二つであります。仏教文化研究所は後者により深く関わり、さまざまな学問領域に関連し、人間の存在の根底に深く関わっている仏教を学問的に探求する研究機関です。

ここでは教員や研究員が資料や情報を収集し、整理して閲覧に供します。また内外の研究機関や研究者との交流をすすめる、時代即応の研究を行います。長年地道に行われてきた資料・情報の収集と整理の成果は確実に現れてきており、東海地方の真宗寺院の所蔵資料の収集・整理においては、随一の質と量を誇っており、報告書も出されております。また『歎異抄』に関する古写本、版本、注釈書や研究論文の収集についても高いレベルを保っていると自負しております。

こうした研究活動の一方で、Doプラザ閲蔵のギャラリーDoにおいては、実物資料の展示と解説が行われ、「アジア仏教研究会」、「真宗史研究会」、「教行信証学習会」などの教化活動にも盡力し、「現地で学ぶセミナー」のようなエクスカージョン企画も実施されております。

## 学問の社会的価値

同朋大学学長 浅野 玄誠

今年もこうした成果をまとめて『研究所紀要』第33号が出版されることになりました。史料紹介といった歴史研究の成果、応通文庫目録、名古屋教報目録といった資料整理、加えて日本史関連の論文や教学的視座に立ったもの、仏教学的考究に至るまでその内容は多彩です。

仏教文化はすなわちわたしたちの存在する社会に通底する課題です。それは単なる一学問領域ではなく、いのちの問題そのものに関わる基礎研究を意味します。ややもすれば、一元的、時限的に、カテゴライズして物事を考える風潮のある現代において、わたしたちは今一度、相互に関係性を持ちながら依存的有機的に存在する文化のあり方に向けておくべきではないでしょうか。

仏教を課題とする地平は、二元的な方位ではなく、もっと複雑なマトリクスを形成しています。常識的なアルゴリズムに囚われることなく、自由に奔放に考察されるべきだと考えます。

このところ人文学研究は世間的には低調に見えます。牽強付会な理屈が時代を支配しています。表層の倫理に牽引されることなく、本質に直截に切り込むような基礎学が軽視されているからではないでしょうか。

その意味で同朋大学仏教文化研究所において多様で個性的なアプローチが実践されていることは、まさしく仏教文化研究所の狙侯する所であります。この拙文をしたためている段階で、まだ内容を読ませていただいていることは残念ではありますが、心から楽しみにしております。

## 追悼 織田顕信学兄

小山 正文

当研究所の所長を一九九二年四月より二〇〇一年一月まで、足掛け十年間にもわたり勤められた本学名誉教授の織田顕信学兄が、二〇一三年六月十五日（土）還浄された。法名を光闍院こうせんとん積顕信せきけんしんと申し、行年七十七歳であられた。痛惜の念まことに切なるものがある。

学兄は一九三七年に愛知県あいちの東部三河国に生を享け、一九六〇年の本学卒業と同時に大谷大学大学院へ進学された。大学院では藤島達朗先生（一九〇七―八五）に就いて、文学研究科仏教文化専攻を修学され、一九六七年まで在京在学。この年学成って母校の本学へ戻られ、二〇〇五年まで奉職されたのである。二〇〇八年には大著『真宗教団史の基礎的研究』を法蔵館より刊行されている。この著書を通し、われわれは学兄の温厚篤実な学風を感得することができるであろう。

学兄が大学院へ入られた年に実は私も大谷大学に入学したが、当時の大谷大学は今と違い、寺院子弟ばかりのこぢんまりとした学舎であった。したがってすぐに学兄ともお近付きになれたが、はじめ私は毬栗頭いかりのたまごの色白で童顔の小柄な学兄が、院生であるとはつゆ知らず、親しくお声掛けをしてしまい失礼したことを覚えている。やがて下宿先の東本願寺前三河話所の小さなお部屋へも幾度となくお伺いするようになり、色々とお教えをいただく身となったが、学兄は私がごとき一介の生意気な学生の意見にも耳を傾けて下され、それを小まめにメモされるのには驚くほかなかった。

学兄とのこうした親交がご縁となり、後年、私のような者が本学に三〇年間もお世話になるうとは、夢想だにしなかった。この間にも私は数え切れないほどご自坊に学兄をお訪ねしては、時間の経つのも忘れて語り合ったが、もうそれも叶わず悲涙を新たにするばかりである。

学兄は大変な蔵書家でも知られており、その一端は当研究所の二〇一〇年度前期展示図録『真宗文化史とその周辺―織田顕信コレクション―』からも十分窺知できるが、舌を巻くのは、われわれが所持しない地方の意外な図書を数多く架蔵され、それを足の踏み場もない書庫内からすぐに取り出して、示して下さることであった。この見事な早業も、もうみることができないのかと思うと、本当に寂しく残念でならない。今はただ一刻も早く私もかの土へ参り、俱会一処を願うのみである。

合掌作礼

〔織田顕信先生の同朋大学における略歴〕

- 一九六七年四月 同朋大学図書館主事兼司書
- 一九七三年四月 同朋大学助手
- 一九七五年四月 同朋大学講師
- 一九七六年四月 同朋大学助教授
- 一九七七年四月 同朋大学仏教文化研究所員
- 一九七八年六月 同朋学園大学部附属図書館々長補佐
- 一九八三年四月 同朋大学教授
- 同年五月 同朋学園大学部附属図書館長
- 一九九一年四月 同朋大学仏教文化研究所幹事
- 同年六月 同朋学園七五年史編さん委員会委員長
- 一九九二年四月 同朋大学仏教文化研究所所長
- 二〇〇五年三月 退職 同朋大学名誉教授

## 〔新刊紹介〕

松金 直美

## (1) 小山正文著『続・親鸞と真宗絵伝』

『親鸞と真宗絵伝』（法蔵館、二〇〇〇年）の続編として、前者以降に発表された筆者の研究成果が、大著にまとめられた。親鸞や初期真宗に関する論考を中心として、四章に整理され掲載されている。新出の親鸞真蹟をはじめとする諸史料について、翻刻とともに解説がなされており、当該分野において今後活用されることを期待してやまない。

序文（大谷大学名誉教授 名畑崇）

## I 親鸞の真蹟

『顕浄土真実教行証文類』の諸伝本

親鸞真筆の『皇太子聖徳奉讃』

新出の親鸞真蹟をめぐりて

大阪府八尾市・豊澤家の真宗法宝物

新発見の親鸞真蹟―『往相回向還相回向文類』の断簡―

名号本尊の一事例―高僧・太子像を描く九字名号―

山形安祥寺蔵の十字名号

冷泉家本『豊後国風土記』の書写日

出雲路乗専の生年

## II 親鸞の周辺

親鸞の俗姓―司田純道氏の学説をめぐりて―

初期真宗史料としての「御入滅日記事」

『比良山古人霊託』の善念と性信―親鸞門弟説の疑問―

初期真宗三河教団の構図

## III 和讃と和歌

『良観和讃』の新出本紹介と翻刻

語り継がれた親鸞伝記の一史料―『良観和讃』をめぐりて―

伝親鸞作の和歌集―『御開山御詠歌三百七首』の紹介と翻刻―

笠間時朝鹿嶋社奉渡唐本一切経

寛永二十一年本『浄土依憑経論章疏目錄』

蓮如の名

## IV 真宗の絵伝

真宗絵巻・絵詞の成立と展開

法然と親鸞―絵巻からみた師弟関係―

滋賀善敬寺蔵の親鸞絵伝

親鸞の母吉光女像

光明本尊の一考察―愛知法蔵寺本をめぐりて―

(法蔵館 二〇一三年八月刊 A5判 五七四頁)

本体価格二二〇〇円)

## (2) 蒲池勢至著『真宗民俗史論』

本書は、著者の前著『真宗と民俗信仰』（吉川弘文館、一九九三年）の刊行以降、二十年間に執筆された論考を中心にまとめられた労作である。

第一章でまず真宗民俗の問題視角と枠組みが示されている。真宗民俗には、①真宗の民俗性と②真宗の反民俗性がある。習合論に基づく①のみならず、真宗が生み出した民俗である特性を示す②への視点も重要であるとする。

長年にわたり地域のフィールド調査に携わり、その調査成果である民俗資料と文献史料の両者をもとに活用しながら、門徒の民俗を遡源的に究明する歴史民俗学的方法による真宗民俗論の重要性と可能性を、様々な事例に基づいて示された一書である。

## 第一章 真宗民俗史の方法と課題

## 第一節 真宗民俗史の方法

第二節 真宗民俗史の課題

第二章 真宗門徒の葬送儀礼

第一節 真宗の葬送儀礼

第二節 「惣仏」としての繪像本尊―湖北地方のオソウブツ―

第三節 門徒もの知らず―脱落した習俗―

第三章 名号と御文の民俗

第一節 名号の祭祀形態と機能―道場から寺院へ―

第二節 御文と門徒伝承―御文から御消息へ―

第四章 真宗門徒の村と民俗

第一節 尾張の寺檀関係と複檀家

第二節 西三河における真宗門徒の村と民俗

第三節 尾張・三河における真宗民俗の位相

第五章 蓮如伝承の生成と門徒の信仰

第一節 蓮如絵伝と伝説の成立

第二節 三河の蓮如忌と蓮如伝承

第三節 「蓮如」の世俗化

第四節 「蓮如」の民俗化と門徒の信仰

結語

(法蔵館 二〇一三年一〇月刊 A5判 四五八頁)

本体価格八〇〇〇円)

(3) 同朋大学仏教文化研究所編『教如と東西本願寺』

東本願寺を創立した教如に関する初めての歴史研究論集を、二〇一三年の教如上人四百回忌を記念して刊行した。本研究所が企画し、宗門内外の研究者から構成された執筆陣によって、教如の実像と、本願寺の東西分派の歴史を、様々な視点から検証した。今後の研究進展に資するべく、本願寺教如の略年表や関係系図も収録している。近年の研究成果に基づき、徳川幕府による政治的意図ではなく、教如教団の主体的独立と

する歴史観を示した論集である。

序文 真宗大谷派宗務総長 里雄康意

巻頭言 同朋大学仏教文化研究所所長 小島忠昭

総論 本願寺教如―その生涯と歴史的論点―

本願寺教如 略年表／関係系図

第一部 本願寺教如と東西分派

① 北陸との関係 「教如と石山合戦および在国期の北陸」

コラム1 信長との関係 「教如による大坂籠城の理由」

② 秀吉との関係 「教如と豊臣政権」

コラム2 家族問題 「教如とおふく(教寿院如祐)」

③ 継職問題 「准如の継職から見た教如」

④ 家康との関係 「教如の東本願寺創立」

⑤ 教団の整備 「東西分派後の東本願寺教団」

第二部 教如論の諸問題

⑥ 史料論の課題 「教如史料論」

⑦ 地域教団論 「教如教団の地域的基盤

―三河を事例として―」

⑧ 東本願寺家臣 「教如とその家臣団

―御家中衆座列関連史料の紹介―」

⑨ 茶人との交流 「文化人としての教如

―自筆書状にみる交流―」

コラム3 教如と茶器 「本願寺肩衝」

⑩ 本願寺と梵鐘 「本願寺の梵鐘と教如」

コラム4 繪像と伝説 「教如の寿像と伝承」

参考文献一覧／史料解題

あとがき 青木 馨・安藤 弥

(法蔵館 二〇一三年十二月刊 A5判 二九二頁)

本体価格六〇〇〇円)

木越祐馨

草野顕之

遠藤 一

吉井克信

岡村喜史

川端泰幸

松金直美

金龍 静

安藤 弥

太田光俊

青木 馨

山口昭彦

小山正文

蒲池勢至

## 《研究会活動報告》

## 「真宗列祖」研究会 活動報告

黒田 浩明

二〇一三年度は次の通り、研究会を実施した。

実施日 4 / 23、5 / 7、7 / 23、9 / 17、11 / 19、12 / 17、

2014年 1 / 14

参加者 小島恵昭 川村伸寛 黒田浩明 村上亘（同朋大学大学院博士  
後期課程満期退学）

この研究会は、大谷派の真宗学者においては比較的採り上げられることの少ない列祖の教学および思想に焦点を当て、その時代教学性を探求し、翻って現代の真宗人としてのあり方について考えることを目的とする。本年度は、存覚上人の著書『女人往生聞書』をテーマに採り上げ、通年で研究してきた。主に本書の概略のほか、仏教と女性差別の問題を取り巻く諸課題について研究・討議を行った。

研究の主な論点は、①『女人往生聞書』の書誌、②南北朝期の真宗教団における女性教化、③仏教女性史の見直しと、『女人往生聞書』の位置づけの確認、であった。

なお、本年度は、『女人往生聞書』について書誌学的観点から研究する上で新たな視点を提示できるような基礎資料を探し出せなかったこともあり、前年まで年一度行ってきた研究発表を見送ることとした。

次年度は、存覚上人の著作に留まらず、真宗列祖の思想を幅広く探究すべく、研究会活動を行う予定である。

## 中国日本仏教思想史研究会 活動報告

藤村 潔

二〇一三年度研究会の実施、構成メンバーについては以下の通りである。

実施日 1 / 30、4 / 18、5 / 21、6 / 11、7 / 15、9 / 25、11 / 6、

12 / 18

参加者 玉井威、藤村潔、飯田真宏、市野智行、高木祐紀、中川剛、  
花榮、廣田万里子

本研究会では、『大正新脩大藏經』にある『大乘起信論』（以下『起信論』と称す。馬鳴菩薩造 真諦三藏訳）を定本とし、『起信論』の漢文と岩波文庫（宇井伯寿・高崎直道訳注）を輪読し研究している。本年度は『起信論』の中で正宗分に属する第三「解釈分」を検討した。

本年度の研究としては大乘の「信」について深く検討できた。『起信論』全体の構成は「心生滅門」が最も長文であり、そこには「如来藏」と「阿頼耶識」の主要概念が説かれている。その思想的基盤があって、大乘菩薩の「信」が問われてくる。例えば論の文脈で「正定聚」が示されるが、あくまでそれは凡夫や二乗の「不定聚」とは階位が異なるといったことを示すものである。また、議論の中で、不定聚や正定聚といった概念はインドの原始仏教には見受けられないと指摘があった。つまり、ここにおいて『起信論』独特の「信」の概念が形成された由来がある。

次年度では、第四「修行信心分」の内容に移る。ここでは「信心を修行する」といった点が大きな課題となる。この背景には初期大乘経典に属する『華嚴経』や『維摩経』の「信」の経説が密接に影響に関係していると思像される。引き続き『起信論』の思想究明をしていきたい。

## 真宗史研究会 活動報告

安藤 弥

第一回目(通算第二八回)

【日時】十一月七日(木)一六時三〇分～一八時

【題目】戦国期本願寺教団論の予備的考察

【報告者】遠藤一氏(元久留米工業専門学校教授)

第二回目(通算第二九回)

【日時】二〇一四年二月二十五日(土)一三時～一六時三〇分

【題目】特別企画『教如と東西本願寺』刊行記念シンポジウム

【会場】浄照寺(愛知県豊田市)\*教如隠居屋敷「北ノ御所」現存地

【報告者】金龍静氏(本願寺史料研究所副所長)、山口昭彦氏(真宗大

谷派宗務所)、小山正文、青木馨、蒲池勢至、松金直美

本年度の第一回目は、遠藤一氏の研究報告で、本研究所編『教如と東西本願寺』所収の遠藤論文に関する研究調査の一環が提示された。とくに本願寺教如と西国地域の関係について、丹念な史料の提示に基づき、明らかにされた。

第二回目は、特別企画として教如四百回忌を機縁とした本研究所編『教如と東西本願寺』の刊行記念シンポジウムを行い、一般公開として五〇名前後の聴衆を得た。まず、浄照寺住職渡辺真氏のご案内により、「北ノ御所」(教如隠居屋敷)の見学会をおこなった。続いて、安藤の司会進行により、金龍氏はじめ参加した執筆者陣から、論集の内容とその魅力を提示した。天正十五年顕如譲り状の史料的人格をめぐる諸問題などが活発に討議された。

次年度も引き続き二回程度の研究会活動を予定している。

## 「日本仏教の成立と展開」研究会 活動報告

脊古 真哉

「日本仏教の成立と展開」研究会(小島恵昭・大山誠一・黒田龍一・脊古真哉・吉田一彦)では、各研究参加者の研究領域・関心を基礎に、幅広く日本仏教・日本宗教に関わる問題を取り上げてきている。

二〇一三年度には、二〇一三年一月二日に研究会を、二〇一四年三月十日・十一日に現地踏査を実施した。

このほかに二〇一三年八月四日には、研究会の参加者が中心となり、服部英雄氏(九州大学大学院教授)をお招きして、同氏の『河原ノ者・非人・秀吉』をめぐって「を同朋大学仏教文化研究所特別講演会として開催した。また今年度の研究所の前期の展示は、脊古が企画・統括として「聖徳太子信仰の世界」が開催されたが、展示期間中の六月二十九日には、一般公開のかたちで吉田一彦「聖徳太子信仰の伝記と寺院」、脊古「聖徳太子信仰のひろがり」の講演を実施した。

一二月の研究会では、①黒田龍一「纏向遺跡と伊勢神宮・出雲大社」、②大山誠一「記紀神話と伊勢と出雲」の報告が行われた。研究会のメンバー以外にも、成瀬高明氏(椋山女学院大学)林淳氏(愛知学院大学)、曾根正人氏(就実大学)らの参加を得て、活発な議論が展開された。三月の現地踏査は、月十日から十一日にかけて奈良県奈良市内の伴墓(重源三角五輪塔、伴寺跡)、頭塔、奈良国立博物館「お水取り」展、般若寺、北山十八間戸、不退寺、大安寺、喜光寺(菅原寺)菅原神社を踏査・見学し、十一日の夕刻から深夜にかけて東大寺二月堂の修二会を見学した。

## 「教行信証」学習会 活動報告

吉田 暁正

講師：張 偉 先生

趣旨：漢文として『教行信証』を読む

会場：同朋学園Doプラザ閲覧2F 多目的会議室

テキスト：東本願寺刊『真宗聖典』（必要に応じて資料配付有）

開催日	2013年	4/25	5/23	6/27	7/25	9/26
	10/24	11/21	2014年	1/23	3/27	

今年度は、『教行信証』『化身土巻』における『観経』の顕彰隠密の課題について学習している。（『真宗聖典』333頁）

特に、善導の『観経疏』『玄義分』の引文、「今この『観経』はすなわち観仏三昧をもって宗とす、また念仏三昧をもって宗とす、一心に回願して浄土に往生するを体とす」と説かれている「宗」と「体」の問題について尋ねた。「宗」は中心であり、「体」は具体性をもって現れる形であるが、宗は本来一つである。善導の説は「一経両宗」「二宗一体」といわれ、なぜ宗が二つ立てられたのかという問いについて考えてきた。法然は、『選択集』において「定散の諸行は本願に非ず、故に之を付属せず。亦た其の中に於いて観仏三昧は殊勝の行なりといえども、仏の本願に非ず、故に付属せず。念仏三昧は是れ仏の本願なり。故に以て之を付属す」と、廢立を説いている。

親鸞は、「定観成就の益は念仏三昧を獲るをもって観の益とすることを顕す」と説き、廢立とは考えていない。親鸞は、二宗を立てた善導の深意を受け止めた。韋提希に説かれた釈尊の声は、時間と場所を限定しない如來の法音として、未來世の一切衆生へと開かれた。善導の『観経』の了解を尋ねつつ、この課題の学習を続けたい。

## アジア仏教研究会 活動報告

武田 龍

開催日	4/15、6/10、7/22、10/1、11/26、
	2014年1/29、3/12

参加者 武田龍、玉井威、宮崎保光、廣田万里子、中川剛、藤村潔

鳩摩羅什訳『妙法蓮華経』（「法華経」と略称）信解品まで読み進んだ。

前の譬喩品は、苦悩のあふれる現世を火宅（火に包まれた家）と見る有名な「火宅の譬喩」を用いて、濁世で苦悩する衆生の姿を燃え盛る家の中で遊びに夢中の子どもたちに譬え、父が彼らを現世の苦悩から救い出すために、羊車・鹿車・牛車の三車を示して外へと誘い出すというものである。羊鹿牛の三車は声聞乘・聲支仏乘・菩薩乘を表す譬えで、如來が巧みな方便をもって衆生を教化することを描く。

信解品は、この巧みな説法と舍利弗への授記（将来必ずさとりを得るといふ予言）を聞いて衝撃を受けた仏弟子のリーダーたち（須菩提、摩訶迦延、摩訶迦葉、摩訶目犍連）が、これまで仏陀の説法を聞きながら無上正等覺（この上なく正しい完全なさとり）を心から求める修行をしてこなかったことを告白する内容である。これが、息子と別れてから長者となった父親と、各地を流浪し貧窮した身の息子との再会という設定で描かれる長者窮子の喩で有名な箇所である。貧窮し心まで萎縮して頑迷固陋となった息子を立ち直らせてから全財産を譲ろうとする父親の心遣いに重ねて描かれ、一仏乘を説く師の巧みな教導が称賛される。羅什による漢訳であることに注意しつつ読解に取り組んでいる。

二〇一三年度彙報

《研究所構成員》

所 長 小島恵昭 (社会福祉学科)  
 所 員 服部仁 (人文学科) 木野美恵子 (社会福祉学科)  
 平野仁美 (社会福祉学科)

所員・幹事 安藤弥 (仏教学科)

所 員 松金直美

研究顧問 織田顕信 (S6/15) 小山正文

客員所員 青木馨 岩瀬真寿美 大山誠一 岡村喜史 蒲池勢至

北畠知量 ギャナ・ラタナ 黒田浩明 黒田龍二

嘉木揚凱朝 脊古真哉 武田龍 玉井威 藤村潔

吉田暁正 吉田一彦

客員研究員 飯田真宏 市野智行 川村伸寛 中川剛 新野和暢

松山大

特別研究員 河村諒 高木祐紀 棚橋めぐみ

《所員会議》 4/16 5/14 6/18 7/16 9/18 10/15  
 11/19 12/17 2014年 1/21 2/19

《公開講座等》

・「教行信証」学習会

：講師・開催日等は前掲「活動報告」参照

・現地で学ぶセミナー

第1回 7/5 (金) 「南大和の寺社」(講師 脊古真哉)

第2回 11/12 (火) 「飛騨高山の真宗文化」(講師 松金直美)

・特別講演会

8/4 (日) 講題『河原ノ者・非人・秀吉』をめぐって

講師 服部英雄氏 (九州大学教授)

《ギャラリー展示》

・前期「聖徳太子信仰の世界」展

会期 6/25〜7/9

関連公開講座：6/29 テーマ「聖徳太子信仰の伝記と寺院」

講師 吉田一彦氏 (客員所員 名古屋市立大学教授)

司会・コメンテーター 脊古真哉氏 (客員所員 本学講師)

・後期「本願寺教如と三河・尾張・美濃」展

会期 11/6〜27

《研究・調査活動》

・真宗寺院史料調査

9/2〜3 願寿寺 (浄土真宗本願寺派・兵庫県宍粟市)

随陽寺 (真宗大谷派・兵庫県宍粟市)

法性寺 (真宗大谷派・兵庫県宍粟市)

西光寺 (浄土真宗本願寺派・兵庫県宍粟市)

\* 金山家文書も調査、播磨公弁円墓なども見学

9/5 聖運寺 (真宗大谷派・愛知県西尾市)

10/2 崇覚寺 (真宗大谷派・名古屋市中区)

2014年 2/24 南殿光照寺 (真宗大谷派・京都市山科区)

・『教如と東西本願寺』(法蔵館、2014年12月) 刊行